

# ツミと苦しみの悪循環

——純粹倫理の苦難観を見直す——

高橋徹（倫理研究所専門研究員）

いずれにしても、人間が生まれてきたのは幸福に生きることが目的だ、なんて考えないほうがいい。絶対に不幸だということ、絶望だということを感じて生きなければならないはずなのに、幸福に生きるために生まれてきているんだなんて錯覚を前提にしている（岡本太郎）

## はじめに 一過去を振り返りつつ、未来を見据える

本稿における問題提起をひとことと言え、**「純粹倫理はその発見と提唱から六十数年経過した今も、未来に向けて大きな可能性（革命性）を持っている。にもかかわらず、その本質がいまだ世の中全体で十分に理解されていないし、実践されてもいない。この状況を打破するには、どうしたらよいか？」**ということである。このような問題意識をもって、純粹倫理の核心とも言える苦難観を見直したい。

筆者は、2003年4月に刊行された『倫理研究所紀要』第12号（倫理研究所刊）に「**苦しみは変容の火—G・1・グルジェフと丸山敏雄の苦難観**」と題した論文を寄稿し、ロシアの神秘思想家グルジェフ（18??～1949）と、倫理研究所の創始者、丸山敏雄（1892～1951。以下、敏雄と略す）の苦難観を比較した。

それから10年という月日が経過した。この論文を書いたのは、たしか前年（2002年）の夏だったと記憶する。思えば、敏雄の唱道した純粹倫理（新しい倫理、実験倫理、絶対倫理とも呼ばれる）に触れて、まだ間もないころである。

純粹倫理のことをよく知らずに書いた当時のこの原稿を10年ぶりに読んでみると、論の進め方や表現等については気負いや性急さが感じられるものの、内容や結論に関しては納得のいくものであり、（自分の文章に対してこう言うのも変だが）特に異論はない。もっとも、よく考えれば、この論文はグルジェフと敏雄の苦難観を順序立てて整理し、相互に比較しただけのものだから、結局、2人の先達の苦難観が時代を超えた普遍妥当性を持っているということに今回、筆者が改めて気づき、感じ入ったにすぎない。

そして、もうひとつ思ったことがあった。2人の苦難観は今の時代に価値があるにもかかわらず、現代的な感性からすると、いささか高邁な印象を受けるということである。グルジェフの場合は苦難観にかぎらず、たいていの講話や自筆の文章自体に難解な面があるが、敏雄の苦難観はある意味で「要注意」だと思った。

というのは、敏雄の場合、戦中・戦後まもない頃までの論文を除けば、晩年（1947～1951年）の文章の多くは月刊誌（倫理研究所の機関誌『文化と家庭』、のちに『新世』と改題）に掲載されたもので、語り口は柔らかく、万人に語りかける優（易）しい表現も手伝って、表面的にはわかりやすいからである。そのわかりやすさゆえにスラスラと読むことができ、行間というか、内容の深さに気づかず、その真に意味するところをとりこぼしがちな面が多い。つまり、本来は精読や熟読が必要なのだが、

ついつい軽く読み飛ばしてしまう。そして、これは「要注意」であるだけでなく、ある意味「危うくて」「危機的」なことでもあると思った。

敏雄の苦難観、言い換えれば純粋倫理の核となる見方・生き方は、そもそも旧来の道徳（純粋倫理登場以前の道徳、「旧道徳」と呼ばれる）が実生活の幸不幸との結びつき（実効力や強制力）を失い、単なるお題目のようになってしまったことを前提にして新たに生まれたものだ。旧道徳の無力さを憂えた敏雄が、高邁で抽象化したこの〈旧道徳〉と〈苦難〉とを橋渡しするための中間設備として新たに見出したのが純粋倫理だった（後述「1-2 純粋倫理の核にある苦難観の位置づけ」参照）。

旧来の道徳と、日常生活の幸不幸との相互関係をはっきりさせようとして登場した純粋倫理（敏雄はこの中間設備を「徳福一致の倫理」とも呼ぶ）自体が、今日のわれわれからすると高邁で、日常生活に適用するうえで——つまり実践するうえで——かつての旧道徳のような様相を帯びてきている。これは現在の社会意識（大衆意識）と60年以上前に書かれた文章の雰囲気のようなものとのズレだとも考えられる。

この「純粋倫理自体が旧道徳化しつつある」ことは、純粋倫理の存在そのものと、それに関わるすべての人にとっての大きな危機である。はっきり言えば、倫理研究所自体にも大きな苦難が襲いかかっているのであり、このことを見据えて、きちんと対処しないと、せっかくの宝の山である純粋倫理自体が形骸化してしまうと、筆者自身も危機感を強めた。

この現状を深く認識し、それを打破するにはどうしたらよいか？

その入り口が、本論で述べる「ツミと苦しみの悪循環」の全体像を把握することであり、そこからの転換を試みることである。ここでの転換とは、苦しみをみずからのツミを払い落とすために活用すること、その方法論を探り、確立することである。これは、苦難の意義を再度あぶりだす試みでもある。

このようなことを前提に、今回、10年前のグルジェフとの比較論では取り上げることはできなかった点やその後の研究成果の一部を急遽まとめることにした次第である。

なお、本論は、ある程度、純粋倫理に触れたことのある人を対象としている。また紙数の関係もあって、先の「ツミ」も含めて純粋倫理独特の概念や用語を説明なしに使用している場合もある。その点、ご了承いただきたい。